【五月の言葉（令和四年）】

鏡は嘘をつかない。心を映す鏡があれば…、

◎◎◎◎◎

グリム童話の「白雪姫」の物語……『ある国に王と妃（きさき）の願いを受けてかわいい白雪姫が生まれました。しかし、妃は病気で亡くなられ新しい妃が来られました。継母である新しい王妃は、自分こそが最も美しいと信じていて、城にある魔法の鏡に「世界で一番美しい女性は誰？」と訊ねると、鏡は決まって「それはあなた様です」と答えてくれるのでとても満たされた毎日を送っていました。ところが、白雪姫が成長したある日、王妃がいつものように鏡に「世界で一番美しい女性は誰？」と問いかけると、何と「それは白雪姫です」という答えが返ってきたではありませんか。怒り狂った王妃は白雪姫を殺害する計画を企（くわだ）てるのですが……。』

「王妃は白雪姫に負けたことが悔しくて嫉妬のあまり怒り狂った」という解釈の一方、「王妃は鏡に本当の事を言い当てられて怒り狂った」という解釈もできます。つまり、最も美しいのは自分ではなく白雪姫であることを王妃は気づいていたのかもしれません。人間という生き物は、本当のことを言われると怒る癖があるようです。物語の中では、この王妃は最大の悪役ですが、この王妃に誰にでも共通する人間の本性を感じます。

仏教では怒りを「瞋恚（しんに）」と言い、三毒（さんどく）の煩悩（代表的な三つの煩悩）の一つに挙げます。これを親鸞聖人は「いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心」と具体的な言葉で述べられています。この毒は、生まれながらにして私たちが内側に抱え込んでいる厄介な毒のようです。

（吉村隆真著「心を変える三十六のレシピ」参照）